

作品集

敬神崇祖

齋藤 哲 一

我が國に於ては古來敬神崇祖の念あり。幼兒より之を吹き込んで居るが、敬神崇祖は我が大日本國の一大美風である。否、建國創始の由來は之が根本をなして居る。神武天皇御即位の儀式は即ち之が顯れであつて已降連綿と傳ひ來つて二千六百年、敬崇の道は國民道德の根幹をなして居る。

然し乍らこの事は意識的に行はれて居るのではなく長い歴史が吾れを無意識的に斯くあらしめるのであつて行動の一行が之に妥當するのである。日本國民性の良さはこの如く不知々々に行はれて居る最高道德にある。之の敬神崇祖の念こそ上下の心を團結さす基をなすものであるので今次事變に於て精神總動員の強調にとまなひ殊に鼓吹されて居るのである。

では神とは祖とは何ぞや。神とは言ふ迄もなく建國の昔日本の基礎を作られ給ふた、天照大神、神武天皇等より代々の天皇に到る皆神である。今上陛下は現神であらせられる。祖とは吾等血縁の祖を言ふので、各自の父母の父母、即ち遠く溯つて尋ねれば建國聖業の昔神々に御遣ひ申したその一人が先祖である。然してこの神天地と共に窮りなく金匱無缺皇統連綿として萬世に垂れ給ふ。そして之におつかひ申す民は又萬世不易の民である。各自は祖先の遺業を繼ぎ且子系の範となり祖先の遺業を子

孫に繼がせるべき任がある。

敬崇とは、朝廷に於いては各祭日には神前に御供物を捧げて天皇には御親拜遊ばさる。又國家の爲の犠牲者、戦死者等に對しては靖國神社等に於て 天皇御親拜遊ばれる。上の行ふ所下之に習ふ。上下舉つて敬神の顯れは隨所に見られる。又祖を崇ふに於て好相珍物があれば必ず之を捧げ、事あれば之を奉告する等それである。禮記内則の「不善ヲ爲サント思ヘバ父母ニ差辱ヲ殘サント思ヒ果サズ」と、この精神こそ崇祖である。然して思ふ。神と祖とは冥合一體のものであれば神祖につかふるの道は唯真心、まことの心を以つて生者につかふるが如くするにある。神は誠を尊ぶ。神の意に叶ふものこそ眞に人道を濶歩する者である。然して現神の天皇と吾等臣民との關係や如何。皇室と臣民とは本家と分家親と子の關係なるや言を俟たない「義は君臣にして情は父子」である。故に代々の聖天子は我等を子の如く愛し仁しました。仁徳天皇の「高き屋に昇りて云云」の御製、明治天皇の

罪し有らば我をとかめよ天つ神

民は我身の生みし子なれば

の御製等歴代の御仁慈には拜聞して唯々感泣するのみである。此の様に民をみそなほす大御心何で之に御答へ申さずをれよう。この氣持あればこそ戦の場に「天皇陛下萬歲」を唱へて莞爾として死に就くのでこれ敬神崇祖の最高の顯れである。

然して吾が宗祖に於て如何。宗祖程敬崇の念篤き聖者がに他

あらふか。佛教は報恩を説く教へである。況んや法華經の行者日蓮に敬神崇祖の念なくて何ぞ！立教開宗せんとして先づ伊勢大廟に参詣し、弘教に先きだちて母父を教化す。宗祖の孝は既に周知の處であり、國家鎮曉は國體を明らかにし神武聖業の精神に還さんとせられたのであり、又大曼荼羅の國神勸誘は宗祖の敬神崇祖の最高の顯れである。

要するに敬神崇祖とは神祖に對する報恩感謝の念の顯露したものであると思ふ。故に常に報恩謝德の念を以てしなければ眞の敬神崇祖ではないと信ずるものである。(4) (完)

縁陰の下(蛇)

東 菫 生

「ガサ／＼ツ」心よく繁茂した叢を何かが渡る音がしたと思ふと、一尺程の蛇が濕つた路に走り出た。頭が馬鹿に大きく眼はラン／＼として、酒点童子の眼に稻妻を注いだ様な蛇だった。その蛇が私を追つて来る。私はゾツとして足が竦み息が詰り走れぬのを無理に道を馳驅つた。蛇は追つて来る。今にも大きな口が私の頭に噛み付きさうな氣がして恐怖しかつた。

不思議だ。蛇が大きくなるのである。三尺程になり五尺程になり終には一丈程になつて迫つて来る。二本の眞赤な毒舌がメラ／＼と火を吐いて物凄い。冷汗が出て恐怖の念は益々募る。

私は山を越した。野を越えた。川を渡つた。が蛇は追つて来る。まるで成道寺の旅僧安珍を追ふ蛇の如き執着さ。私は有らん限り疾驅した。と途は眞青である。一條の青い路が果し無く續く。走る。涯へ出る。下は怒濤岩を喰む荒海で、怪魚が牙を鳴らして水面を走つて居る。青い路は行詰つて涯上で没する。私はアツと思ふ間無く疾驅の餘力で足が空を飛び涯を離れて荒海がめけて轉落した……。

尻から魂を抜かれる様な氣がしてハツと我に返つた。夢である。私は夢を見て居たのである。氣が付くと体は冷汗でびつしよりと濡れて居る。

馨しい萌出た若草の香が心よく寢醒めの鼻を衝く。樹梢の嫩葉を漏れる陽射しがまぶしい程強い初夏である。樹の彼方に碧いコバルト色の海が和やかな微笑を覗かして居る。

私は午后、雜誌を讀む爲に此の林に來たのであつた。此の草の上で寢臥しつつ讀書して居たが何時しかうつ／＼と眠りの女神に誘はれたのである。女神は私を戯弄して恐しい蛇に私を追はしめたのである。何處かで女神が美しい嬌を作つて大笑して居る様な氣がする。深閑とした林の中、青草に綠樹を漏れて来る光が陰を印して居る。檐の綠葉が眩しく陽に映えて初夏の太空中に突進して居る。揺らぐ青葉の上を悠々と白雲が往く。何處かの梢で笛の強調の様な鳥の聲が聞こえて来る。四圍が靜寂だけに良く透る。靜かに瞳を冥じて居ると森林の中に居る様な感